

みそっかすちびっ子
転生王女は
死にたくない! ①

沢野りお
Rio Sawano

Regina
BUNKO



セヴラン

元商人で
実はヘタレな狐獣人。

アルベール

呪いを受けて
シルヴィーの屋敷で
眠っていた老執事。

リュシアン

元冒険者で
大剣使いの狼獣人。

シルヴィー

虐げられた第四王女に
転生した本作の主人公。
チート級の万能スキルを持つ。

リオネル

常に眠たげな
虎獣人の男の子。

ルネ

物静かな
猫獣人の女の子。

Characters

目次

みそつかすちびっ子転生王女は
死にたくない！ 1

書き下ろし番外編
みんなとシャルウイダンス

みそつかすちびっ子転生王女は
死にたくない！ 1

第一章 転生したらみそっかす王女でした

「あんたたち、クビ」

ソファアールから立ち上がりトコトコと使用人たちの前まで歩くと、私は手を腰に当てて胸を少し反らせた。

そして偉そうにむふーっと鼻息を荒くして、私はもう一度言い放つ。

「聞こえにゃかった？ あんたたち、クビ。もういらにゃいから」



——喉がひどく渴^{かわ}いて、目が覚めてしまった。

水を飲もうと、私は体をのろのろと起こそうとする。

……あれ、動かせない？

なんかすつごく、体がダルい……

あふ^{あふ}溢れ出る倦怠感^{けんたいかん}に対抗してなんとか体を起こし、ふと体の違和感を覚えた。

「……手がちっちゃい？」

視線を下ろし、手を握ったり開いたり、グーパーグーパーしてみる。

手が縮んでいる。よく見ると足も縮んでいる……

アラサー女の体が、見慣れない子供の体になっている。

「え、なんで!？」

見覚えのないワンピースタイプのパジャマだし、寝ているベッドも天蓋付きで、普段寝ているベッドじゃない。

ここはどこだろう、とキョロキョロ周りを見て……さらなる違和感に気づいた。

「部屋が暗しゆぎりゆような……？」

いつも寝るときは真っ暗ではなく、常夜灯を点けて寝ているはず。

でもただけ目を凝^こらしたところで、常夜灯はどこにも見当たらない。

軽く頭を横に振り、とりあえず水を飲みに行こうと、重い体をスルスルと引きずって、ベッドを下りてみる。

小さく縮んだ体でヨタヨタと暗がり歩き、途中にある少し光が差しこむカーテンを

開けてみた。

太陽が昇り始めているのか、うつすらと明るい空が見える。

部屋に視線を戻すと、まっつたく見覚えのない部屋に、まっつたく買った覚えのない調度品の数々が並んでいた。

つい、眉間に皺が寄ってしまう。……これは、私の治らない悪癖なんだよなあ。

とりあえず明るくなつた部屋をぐるりと見渡すと、さっきまで自分が寝ていたベッドのサイドテーブルに、水差しとコップが置いてあつたので、トテトテと拙い足運びで近づき、その水差しの蓋を開けてみる。

「うえっ、くしゃ！」

なんじゃこりゃ、水が腐ってるよー!!

この部屋の広さといい、置かれている調度品といい、お金持ちの家に違いないのに、用意された水が腐ってるって、どうなってるの!!

はあ〜っと、思わずため息をつく。

……いや、とりあえず落ち着いて、今の私の状況を把握することにしよう。

私はアラサーの独身女、スタイルは中肉中背だった。

でも今は……どう見ても子供、たぶん小学校低学年ぐらいの子供の姿。

しかも健康だけが自慢だったはずなのに、今の体は病的なほどに痩せていて、ちょっと動いただけで息が切れちゃう、この体力のなさ。

極めつけは、小さなワンルームに住んでいたはずなのに、起きたら知らない部屋で寝ていた状態。

「どうなってるゆの?」

言葉を発して、とっさに手で口を押さえた。

……舌が回らないのか、この子ってば嘔み嘔みなんですけどおー!

口から手を外し、じっと小さくなった両手を見つめながら昨日の自分の行動を思い出してみる。

昨日は仕事に行つて、少し残業になったからご飯作るのが面倒になって、コンビニでお弁当買って……

いや、たしかコンビニでお会計中に、なんかすごい明るいライトに照らされて……

「ううん、これは……もしかして……?」

事故死からの、転生ってやつ?

いやいや、そんなまさか……と否定したいけど、コンビニに突っこんできた車か何かに巻きこまれ死んでしまったらどう私が、目覚めたら子供の姿になっていたって、異世

界転生以外のなんなんだよっ。

私は、切り替えの早い女だから、なんとなく今の状況を受け入れていた。

どうやら、今生も女の子みたいだ……ちよっと発育不良だけど。

「鏡、みちやい……」

この広い洋室に置かれているのはベッド以外に、ソファアセットと装飾の可愛い白い文机と椅子。

部屋の端には同じく白い大きなクローゼットとドレッサー、鏡があった。

全身が映せるほど大きな鏡の前に向かい映った自分の姿を見て、口がパカカンと開いてしまった。

艶のない茶色の髪が背中を覆うほどに長く、全体的にボサボサに痛んでいる。

病的なほど青白い肌には骨が浮き出っていて、伸ばしっぱなしの前髪を掻き上げて顔を見ると、目の下には隈がべつとりとついていて、唇は紫色でカサカサに乾燥していた。

唯一綺麗なのは、明るい金色の瞳くらいだった。

我ながら、これはひどい。いわゆる養育放棄の被害者みたいだ。

今世の私は恵まれていないようだ……残念です。

人生ハードモードか……嫌だな。

ズーンと気分が落ちていると、急に部屋の扉がバタンツと大きな音を立てて開いた。

えっ、何事!?

驚いて身構えると、メイド服を着た人がワゴンを押しながら部屋に入ってきた。

そして私と目を合わせることもなく、持ってきた食事らしきものの皿を無言でテーブルに並べていった。

おいおいっ、ノックは!?

自分が今いる場所も状況もわからないけど、恰好から見えてあなたメイドだよね?

何その態度! 「おはようございます」 ぐらい顔に笑顔ひっ付けて言いやがれっ!

挨拶と笑顔は社会人の基本だろうが!

心の中では文句を言いたい放題だったが、実際はポカーンとしている間に、態度激悪メイドはワゴンを押してさっさと部屋を出てしまった。

出ていくときにこちらを向いてお辞儀もなかった、と内心で舌打ちしてブチブチ文句を言いつつも、ちよっとだけ期待してテーブルに置かれた食事を覗きこんだ。

……何、これ!?

テーブルの上には見た目からして堅そうな黒くて丸いパンと、ほとんど具のない薄い色のスープ。

……これ、食べて大丈夫なやつ？

えっ、というか私の食事っていつもこんな感じなの？

だって、私の体って腕も足も棒みたいに痩せてるし。

ということは、お腹がぼっこりしてるのって、栄養不足だから？

おい、ちょっと責任者出てこいっ！

今の私は子供だぞ、お子ちゃまだぞ！

栄養大事、成長大事！

貧しい家庭ならしょうがない。

でもこの部屋のグレードの高さで、この粗末な食事はないでしょう！

水差しに腐った水といい、この粗末な食事といい、メイドの態度といい……

もう、頭にきたっ！

ここがどこだとか、今の私は誰だとか、いろいろ考える必要があるけど、そんなの後回しや。

人間、腹が減ったら何もできないんじや！

むふーっと鼻息を荒くして、私は部屋の扉を開けて……開けようとして——いや、この扉、重いな。

よいしょ、よいしょと、なんとかして重い扉を押して体がすべりこめる隙間を作り、部屋を出たのだった。

重い扉から小さな体をすべりこませ出た部屋の外には、長い廊下にそれを覆う赤い絨^{じゅうたん}緞が敷かれていて、壁は白地に金糸銀糸のアラベスク模様で豪華に装飾され、廊下には等間隔で鉛色に輝く花台が置いてある。

裸足^{はだし}で歩く私にとって、毛足の長い絨^{じゅうたん}緞が敷いてあるのはとっても嬉しい仕様だ。

とつてもお金持ちの雰囲気があるお屋敷だけど……なんで花台だけあって花瓶が置いてないの？

廊下をぐるりと見渡すに、私のいた部屋はお屋敷の奥まった場所にあるらしい。真っ直ぐ続く廊下をトテトテとしばらく歩くと、ようやく下への階段が見えてきた。

下の階に続く長い大階段は幅がとても広く、やはりこちらにも赤い絨^{じゅうたん}緞が敷かれている。

何この階段、どこのセレブのお屋敷だよ！

こんな大階段、舞台のセットでしか見たことないぞ。

しかも、私の部屋のあった場所と違って、ここはちゃんと掃除されている。

私の部屋を含む一角は、どうもメイドたちが掃除をサボっていたのか、歩くたびに埃がもうもうと舞っていたもんな。

ところで体力のないこの体は、はたしてこの階段を無事に下りられるのだろうか？

すでに息は絶え絶え、足はブルブル震えているんですけど……

不安と緊張でゴクリと唾を飲みこみたいところだが、そもそも喉が渴^{かわ}いていて飲みこむ唾も出やしない。

片側の手摺りを両手でぎゅっと掴み、屋敷の真ん中に鎮座する大階段を一段一段慎重に、そおーっと、そおーっとゆっくりと下りていく。

……しかし、ここはどこなんだろう？

たぶん、転生している時点で日本でも地球でもないはず。

漫画やラノベでよくある異世界転生なら、中世ヨーロッパに近い感じの文化圏なのかなあ。

掴んでいる手摺りを見てみると、たしかに中世ヨーロッパのキラキラしたロココ調っぽいデザインで、あちこちの壁や柱も華美な装飾が多い。

うん、絶対日本じゃねーな。

キョロキョロ辺りを見回しながら頑張って階段を下りていると、階下から人の話し声

が聞こえてきた。

話し声……というより、なんか誰かが揉めている？

一体何事だ、と安全第一ながらも階段を下りる足を速めて必死に階下に辿り着き、声のするほうに顔を向けた。

そこは広いエントランスホールだった。

高い天井からは、スズランの花のようなランプシェードのシャンデリアが下がり、左右にはいくつか扉が見え、階段を下りてきた正面には大きな両開きの扉がある。

まあ、庶民の家なら玄關ってとこかな。

その扉が少し開いていて、声はそこから漏れ聞こえてきているみたい。

私は好奇心丸出しで、その扉に近づく。

床は絨緞^{じゅうたんじ}敷きから大理石っぽい白い石材に変わっていて、裸足^{はだし}で歩くとベタベタと情けない音がするが、気にしてはいけない。

そっと、少し開いている扉に手をかける。

「王女殿下は体調が優れずお休みになられています。お引き取りくださいませ」

「だからそれを聞いて、こちらも先ほどからぜひお見舞いを……それが無理ならお医者様の手配を、と言ってるではないか」

……え、誰？

一人は黒を基調としたロングドレス風のメイド服を着て、黒い髪をお団子にまとめた若い女の人だ。

さっきの態度激悪メイドと同じ服装だし、ここの使用人だろうね。

で、もう一人は小太りなおじさん。

頭の天辺にだけちょこんと金髪が生えていて、柔らかそうな真っ白い肌に、ぷにぷにの体をしている。

着ている服はスーツに似ているけど、臙脂色のジャケットは膝丈までの長さがあり、襟からブラーツと複雑な刺繍が施されている。

中に着ているベストは淡いクリーム色で、ボタンがキラキラする貝で作られていた。

小太りなおじさんなのに、首元がフリフリのブラウスを着て窮屈そうに見えるし、ズボンはジャケットと同色で膝までの長さしかない。

その太い足に白いストッキングを穿いて、黒い革靴は踵がちよつと高いという、典型的なザ・お貴族様っぽい立派な恰好だ。

メイドに対して偉そうな態度だけど、偉い人なのかな？

「とにかく、中に入れてもらおうぞ！」

小太りなおじさんが、通せんぼしていたメイドを押しつけてこちらに向かってくる。

おじさんの後ろには、別の貧相なおじさんと衛兵らしき人が何人も続いて、こちらに向かってくる。

——あ、ヤバい、見つかる。

逃げなきゃ、と体を反転させる前に、小太りなおじさんは扉を大きく開けてしまった。

小太りなおじさんと、私の視線が『こんにちは』してしまう。

み、見つかったしまった、と私はダラダラ冷や汗が止まらない。

小太りなおじさんは目をカッと見開いて私を見ると、その場に跪き、胸に手を当てて深く頭を下げた。

「初めてお目にかかります。シルヴィー第四王女殿下」

ええーっ、誰それ!?

……シルヴィー第四王女殿下……私ではない。

いいや、私は……シルヴィー……

私は……誰？

小太りなおじさんが跪くのによそに、私の目の前は霞がかり、朧げな何かが見えて

いる。

ううん、これは私の記憶だ。

前世の私じゃない、この痩せっぽちな子の記憶だろう。

女の人に手を引かれて、花壇に咲いた花を愛でる幼い私がいる。

女の人は、私と同じ茶色の髪に金色の瞳で優しく微笑んでいる。

私たちの後ろに、静かに初老の男の人が佇んでいる。

執事服かな？ カチツとしたお仕着せの服装をしている。

そんな……平和で優しい記憶。

それが砂嵐のようにサァッつと消えて……私、一人だけになった。

場面は変わり、さっきまでいた私の部屋。

私以外、誰もいない。カーテンから日が差していたが、そのまま時間が過ぎて夜になる。しかし夜になっても誰も来ない。

部屋の灯りもなく、真っ暗の中……一人ぼっち。

そのあとは、次々と光景が目まぐるしく変わっていく。

私の部屋から、何かを持ち出すメイドたち。

運ばれてくる食事は薄いスープと黒いパン、しかも一日に一度だけ。

掃除が一切されない部屋に、何日も同じ服を着た私がボツンと立っている。

誰とも話さない日々が続き、とうとう誰からも無視される存在と成りはてる。

そうして、私は私の考えも感情も、何もわからなくなった。

ああ……違う。

きつと私は諦めてしまったんだ、生きることを。

一人ぼっちで生きていたくなくて……いつそのこと生きるのを――

と、そこで、ハッ、と我に返った。

私の記憶に囚われていたのは短い時間だったらしく、小太りなおじさんはまだ脆い
たままこちらを見ている。

そして、丁度そこで自分の異変に気づいた。

ゆっくりと辺りを見回す。

意識をして、よく見てみる。

さっき見たときと変わらないはずのエントランス、お花の形のシャンデリア、ひんやりする大理石の床、舞台セットのような赤い絨緞が敷かれた大階段がある。

でも、私にはさっきとは違うものが見える。

……ふふっ、面白くなってきたわ。

私の能力に、やっと私が気づいたのよ。

よしっ、やったるぜ！

「……はじめまして」

おじさんへと友好の印に手を差し伸べて、にっこり無邪気に笑ってみせた。

小太りなおじさんは満面の笑みを浮かべてゆっくりと立ち上がり、胸に手を当てたまま軽く一礼した。

「どうじよ、中へ……」

右手をお屋敷の中へと指し示して、おじさんを誘導する。

通せんぼしていたメイドがひきつった声で「えっ！」と言っているけど、無視無視。そのままおじさんを先導しながら歩くと、ペタペタと音が鳴った。

あ、そういえば私ってば、裸足のままだったっけ。

そろーっと、おじさんの様子を窺うと、ギョッとしたかのように私の足をガン見して、そのまま視線を上げ、信じられないものを見たように顔を強張らせた。

やがて顔が段々真っ赤になり、おじさんは両手を固く握りしめ、体全体を小刻みに震わせる。

えっ、この人大丈夫……と私が慄いていると、どこからか執事服を着た男の人が小走りに近づいてきて、あれよあれよと私たちを、応接間らしき部屋へ押しこんでいった。

さて、と。改めて、応接間の豪華なソファに座って、*「楽しい」* お話をしましょう。

というかこのソファ、めちゃくちゃフカフカで気持ち良くて気分が爆上がりしたのに、メイドが淹れた紅茶がひどいせいで、気分ガタ落ちだよ！！

ホント、ブレないなっお前たち！

色の薄い紅茶……なら飲んでしまいが、じーっと見てみると、古い水とカピタ茶葉で淹れてあるので飲めません。

くそっ。

対面に座った小太りなおじさんは自己紹介から始まり、ずっと一人でベラベラ喋っている。

私はそれに適当に相槌を打ちながら、さっき気づいた自分のステータスを思い出し、これからの作戦を頭の中で考えることにした。

この小太りなおじさんは、トマ・ド・クシー子爵。

内務官という役職で、仕事は主に王宮、王族に関することのお世話をあれこれ……と

か言っていた。

なんとなく前世の感覚で、宮内庁の役人みたいな人と認識しました。

小太りなおじさん——クシー子爵の斜め後ろに立つ貧相な体つきのおじさんは、部下の事務官らしい。

ぞろぞろ連れていた兵士はやつぱり衛兵で、応接間にはそのうちの二人がついてきて、クシー子爵の後ろに控えている。

クシー子爵の話では、私のいるお屋敷——王城の離れは、王宮の敷地の端も端にあるそう。

移動するときには馬車が必須な距離で、王宮の敷地内なのに衛兵を連れていくレベルの安全性が乏しい場所に建てられているとのこと。

さらに話を聞いていくと、どうやらこの離れのお屋敷は、王宮に勤めているベテランの役人にさえその存在を知られていないという。

そんなところに子供一人で生活させるなんて、あんたらは鬼かつ！
そして、クシー子爵は何やら私に用事があるってここを訪れたんだって。

この人、内向きの仕事を任されている役人ということは、王宮で働いている使用人の人事権とか持つてるよね？

私の都合のいいことに、クシー子爵は王族第一主義、王族フエチの人っぽい。

だって、この私の姿を見ても、王族ってだけでキラキラした崇拜の視線すうはいで見てるし、めちやくちや誉めて持ち上げてくれるんだよね。

お喋りの内容も、今日は陛下がどうした〜とか、王子殿下が優秀で〜とか、王族賛辞が止まらない。

さすがに、私がこのみすばらしい姿で使用人に相手にされていないところを見たら、私を蔑あやむむまでいかなくても冷ややかな視線の一つも寄こしそうだが、反対にクシー子爵は、私の世話という重要な仕事を放棄している使用人たちに忌々しい表情いまいまいを向けているということは、少なからずこの人は私の敵ではなさそう。

私はとある考えを思いつき、部屋にいる使用人の一人、この応接間まで私たちを案内してきた執事服の壮年の男をじっと【鑑定】する。

それを終わるとスッと視線を移して、その隣に立つ髪をお団子にまとめたメイドを【鑑定】した。

……ふむふむ。

「クシー子爵……」

私はわざと小さな声でクシー子爵を呼び、顔を寄せる。

機嫌よくお喋りしていたのを止めて、クシー子爵も私のほうに顔を寄せてくれた。どうも、長い間ほとんど人と会話らしい会話をしてこなかった私の舌や口の筋肉は衰えまくっていて、噛みまくりになるんだが、とりあえず頑張ってお話する！

他の人に聞こえないように、クシー子爵の耳元へひそひそ。

「えっ！」とクシー子爵は一瞬肩をビクツとさせたが、それ以外は極力平静を保ちながら、私の内緒話を黙って聞いてくれた。

話を終えて寄せていた顔を戻すと、クシー子爵は後ろに立つ事務官をチョイチョイと指で呼び、その人の耳元でひそひそ。

事務官はまったく動じずに、ふむふむと頷いている。

そして事務官は衛兵の一人の耳元でひそひそ。

内緒話を聞いた衛兵はギョツとした顔で事務官とクシー子爵を見たあと、そのまま応接間を出ていった。

クシー子爵が私を見て、満面の笑みで頷く。

よしっ、作戦開始だ！

私はさっき【鑑定】した執事服の使用人に顔を向けて、「ねえ」と呼びかけた。

いや、名前がわからないから名前を呼ぼうにも呼べないんだよ。

正しくは、【鑑定】で名前ならわかるけど、本人から正式に教えてもらってないからね！

だから、「ねえ」って呼びかけたんだけど、あの野郎、無視してません？

私はちよっとムツとして、もう一度「ねえ」と呼ぶ。

……ああ、無視ですか、そうですか、こんなにやろ。

すうーっと息を吸って大声を出そうとしたら、ガチャンと茶器が大きな音を立てて乱暴にテーブルに置かれた。

「おいっ、殿下が呼んでいるのが聞こえるのか！」

小太りなおじさん、怒です。

おおいっ、いいぞ、もつとやれー！

使用人が慌ててクシー子爵に愛想笑いをするけど、時すでに遅いですよ。

その態度にイラッときたクシー子爵は、鋭い視線で使用人を睨んだ。

使用人の隣でメイドがオロオロしているのが、ちよっと笑える。

「ねえ、ここで働いてりゅ人を全員呼んできて」

「はあ？」

「全員よ。下働きの人もね」

不服そうな顔をしてまったく動かない使用人に、クシー子爵がテーブルを指でコツコツと叩いて苛立ちを表している。

「早く、言われたとおりにしないか！」

とうとう怒鳴りました、クシー子爵。怒を通り越して、お怒りモードですな。

クシー子爵の怒気に驚いた使用人は、バタバタと慌てて部屋を出ていき、少し遅れてメイドもあたふたしながら部屋を出ていった。

クシー子爵は深くソファに体を沈めて、ため息をつく。

私はダメ押しとばかりに、自分の飲めない状態の紅茶が入ったカップを、そっとクシー子爵に差し出した。

クシー子爵が不思議そうにカップを覗いて、目を睜（み）で、ついでに後ろに立っていた事務官も覗きこみ、顔を顰（しか）めた。

そう、王族大好きクシー子爵は、私の姿がこんなにみすばらしくても、王族であるというだけで何もかもを尊重してくれる。

なのに使用人風情（ふぜい）が、自分の大切に思う王族を無下に扱うのを許すはずがないのだ。だから、突然の私の作戦にも協力してくれる。

今日、私の住むお屋敷を訪れたのがクシー子爵でよかった。

これから生きていくためにも、まずは、生活する環境を整えないとね。

私にとつて、あんな人たちは邪魔なのです。

ニヤリと悪役ばりに笑った私に、事務官の人がサッとポケットからいくつか飴玉をくれた。

「……もらっていいの？」

私が首を傾げて飴玉を見て、そのまま視線を上げると、事務官の人は無表情のままコクリと頷く。

視線を動かしくシー子爵を見ると、微笑んで「どうぞ」と言ってくれた。

飴玉を一つ手に取り、包み紙を解いて現れたのは赤い飴玉。それを口にボンと放りこむ。

ほのかな甘みと果実の香りが口いっぱいに広がって、とっても美味しい。

ちよつと涙が出ちゃうくらい、嬉しい。

大きな飴とモゴモゴと格闘すること十数分、応接間の重厚な扉を開けて使用人たちがぞろぞろと入ってきた。

執事服の壮年の男性使用人、髪の毛をお団子にまとめたメイドの他に、食事を運んできた態度激悪メイドと、同じ年ごろのメイドが二人。

あとは、コック服を着た太ったおじさんとヒョロイ少年。ゴツイ体をした強面の警備員っぽい男、全部で八人か。

事務官おじさんが、クシー子爵に何枚か書面を見せながら説明している。そして、私に向けて力強く頷いた。

「殿下。他に殿下が生まれる前から勤めていた者が一人おりますが、今は病で伏せっているようですよ」

「そう。では、しよの者はあとで考えましゅ」

再び応接間の扉が開いたかと思うと、今度は衛兵たちが入ってくる。

おおう、五人も入ってきたよ。

これで、応接間にずっといた一人と合わせて、六人の衛兵が集まった。

応接間にもともといた衛兵さんが、クシー子爵の耳元で再びひそひそ。

クシー子爵は渋い顔をして、その衛兵さんに何か呟く。

衛兵さんはビシッと敬礼したあと、応接間の扉を塞ぐように他の衛兵たちを並ばせ始めた。

——さて、そろそろいいかな？

私はクシー子爵に向けて一度頷いたあと、八人の使用人にとびっきりの笑顔を向けた。

「あんたたち、クビ」

ソファアから立ち上がりトコトコと使用人たちの前まで歩くと、私は手を腰に当てて胸を少し反らせた。

そして偉そうにむふーっと鼻息を荒くして、私はもう一度言い放つ。

「聞こえにやかった？ あんたたち、クビ。もういらにゃいから」

しかし使用人たち、とくに執事服の使用人は顔色一つ変えずに、私を馬鹿にするように鼻で笑いやがった。

ムツとした私の耳に、クシー子爵の密やかな笑い声が届く。

使用人たちは、それに対して疑いの表情を浮かべた。

はあ、とクシー子爵は一つため息をつく、スラスラと話し始める。

「あなたがた、ここをクビになったらどうするのです？ 殿下は第四王女で王族としての身分は一番下になりますが、あなたたちはその第四王女殿下の不興を買ったのですよ」

クシー子爵は使用人たちがツツコむ隙もなく話し続ける。

「となれば、第四王女よりも位が上の王族に仕えることは無理でしょう。では、下働きに身を落としますか？ あなたたちのような身元がしっかりしている者が身分の知れな

い者たちと同様に働けますか？ いっそ、城働きを辞めますか？ でも、殿下は辞めるあなたたちに紹介状を用意してくれますかねえ。紹介状がなければ働くところも限られます。どうです？ あなたたちにとってここをクビになるとは、どういうことか想像できましたか？」

クシー子爵がゆっくりと、幼子に教えるように丁寧に細かく説明する。

その言葉を聞いた使用人たちの顔色は、どんどん青白くなっていく。

ちよつと怖いんですけど。

こいつら全員、クシー子爵が私のことを軽く扱うだろうと思っていたんだな。使用人たちより、王族の私のほうが当然身分は高いのに。

でもこの人たちは、私を蔑^{さげす}んでいるうちに、自分たちのほうが偉いって思いこんじゃっていったのかな？

馬鹿、じゃない？

王族ってだけで諂^{へん}われるのは嫌だけど、あんたたちは私の世話をするのが仕事で、それでお給金をもらってたんでしょう？

だったら、ちゃんと仕事しなさいよっ。

内心でアラサー女丸出しになっていた私はソファに座り直し、クシー子爵に「もう



いいわ」と合図をする。

「と思ったけど、クビにはしないわ。しよれよりもあんなたちには、相応しい場所がありゆから」

私の言葉を皮切りに、衛兵の一人が目の中のローテーブルの上で茶色の革袋を逆さに振った。

ゴトン、と音を鳴らして落ちてきたのは、ピンポン玉ぐらいの石——いわゆる宝石です。

メイドの一人がそれを見て、ハッと息を呑む。

それだけではなく、いくつもの宝石やアクセサリー類が次々と袋から落ちてローテーブルの上に散らばっていく。

事務官のおじさんが書類と見比べながら、満足そうにクシー子爵に頷いてみせた。

「これは、殿下の亡くなられた母君の持ちもの。間違いない陛下から贈られたものだ。それがなぜ、メイド如きの部屋から見つかったと思う？」

「わ……わたくしは、な、何も……」

メイドが悲愴感たつぷりの真つ青な顔で、両手を胸の前で祈るように組んでブルブルと全身を震わせる。

「他の者の部屋からも、シルヴィー第四王女殿下の持ちものが見つかった。王宮の気高き使用人が盗人とは、頭が痛いことよ」

クシー子爵は手を額に当てると、やれやれと頭を横に振る。

そして右手を軽く上げて、衛兵たちに命じた。

「捕らえよ」

衛兵たちは使用人たちを手際よく後手に拘束していく。

太っちょ料理人と強面の男は外へ逃げ出そうと扉へダッシュしたが、そこを固めていた衛兵たちに殴られ、蹴られ、結局は押さえこまれた。

こうして、あっけなく使用人たちはみんな、床に膝をつき後手に拘束され頭を垂れることとなった。

衛兵たちは黙ったまま、使用人たちを縄で縛り繋いでゆく。

「お前たちは罪人だ。罪が明らかであることから、裁判の前に嘘偽りを述べることを禁じる手段として奴隷契約を結ぶ。覚悟しておけ」

「ひいッ」

ビクンと使用人たちの体が、過剰に反応する。

最後に何か嫌味でも言つてやろうと構えていた私も思わずギョツとしてしまい、人の

好さよそうな小太りのおじさんをマジマジと見つめた。

えっ、奴隷とか、マジ!?

ぞろぞろと衛兵さんによって連行されていく使用人たちの惨めな姿めづをあえて見ないように顔を背けて、ふうーっとひと息吐いた。

いやあ、異世界転生に気づいたその日に、怒涛の展開だった。私の健康状態を考えると早い展開はウエルカムなんだけど、疲れたよーっ。

ホント、自分の能力に気づけてセーフだったよね。

おかげで使用人たちを「盗人」だと見抜くことができたんだから。

こんなガリガリに痩せたままの私じゃ、部屋から出て少し動いただけで人生がおしまいだっだし、このまま屋敷にいたとしても、人生が終わっていたはずだ。

「いやあ、あんな奴らが殿下のお側に仕えていたなんて、誠に申し訳ございません。私めがもつと早く気づいていたら……」

「いいえ、今回のことはとても助かりました」

「しかし、新しい使用人を早く手配しなければなりませんねえ」

あーっ、新しい使用人かあ。

……正直、いらん。

この与えられたチート能力をフル活用するバラ色で自由な異世界生活のことを考えると、できるだけ余計な人間には側にいてほしくないだよねえ。

異世界の町も見てみたいし、美味しいものも食べ歩きたいし。

でも、非力な子供が一人で生活する……なんて通用しないかなあ？

「あ、あのう。新しい使用人はちよつと……今は、誰も信用できにゃいっていうか……しよの……」

同情を引いて訴えてみようと、可愛い幼女の上目遣いをクシー子爵に向けてみたが、彼はむう、と考えこむだけだった。

しまった！ 私の髪の毛はボサボサで前髪ももつさり状態だから、彼には見えないじゃん！

しかし、クシー子爵は太く短い腕を組んで、うんうんと唸りだした。

「そ、そうですね。また同じことがないとも言えないですしな。しかし、殿下のお世話をどうしたらいいのか……、うーむ」

クシー子爵、あんたってばいい人だな！ 王族相手に限ってだけだなっ。

「おっ、そうでした！ 私がここに来た用事を思い出しました。丁度いいことに、奴隷の引き渡しのお誘いだったのです。殿下、使用人がお嫌なら奴隷を使うのはどうです？」

えっ、奴隷？ 私が奴隷のご主人様になるの？

ええーっ、無理無理無理！！

こちとら平和ボケした日本のややブラック気味企業で働いていたアラサー女子会社員ですよ。

学生時代も「長」がつく役職に就いたこと一回もないし。

人に使われてナンボの平々凡々の人生を歩んでいた私が奴隷のご主人様……いやあ、無理でしょ。

よし、断ろう。

使用人は、なんとか少数人数で通いにしてもらおう。

「亜人の奴隷譲渡なんですが、今回は第一妃様、第三妃様たちが参加されず第二妃様のみでして。なのに第二妃様はエルフの奴隷一人で満足されてしまい、余ってしまったのです。せっかくですから、殿下をお誘いに来たのですよ」

やれやれ困ったものです、とクシー子爵は呟く。

……亜人の奴隷ですって？

そ、それって、人族以外の人たちと会えちゃうヤツ？

ザ・ファンタジーってヤツ？

それだと話がかわってきますなあ！！

恥を忍んでクシー子爵にご教示いただいたことには、亜人族とは人族以外の種族を指す言葉で、王道ファンタジーに登場するようなエルフ族やドワーフ族はもちろん、人型にケモミミと尻尾がある獣人族などがまとめて亜人と称されているのだとか。

何それ素敵だわ、とっても素敵！

「行きましょう。ぜひ。ぜひ連れていってくださいい」

亜人と会える、亜人と会えるー！

その亜人とやらも奴隷らしいけど、まあそれはあとで考えよう。

異世界に来たんだもの、ファンタジー要素を浴びるほどに感じたいのです。

私たちはお互いソファアから立ち上がり、応接間を出てエントランスへと歩いていく。絨^{じゅうたんじ}緞敷^{じゅうたんじ}から大理石の床に変わった瞬間、私の足元からペタペタ音が復活しました。忘れてました、自分のみすばらしい恰好を。

どうしよう、と思わず立ち止まった私だったが、すぐに柔らかい布靴が差し出される。驚いて俯^{うつむ}けた顔を少し上げると、衛兵さんの一人が跪^{ひざまず}いて靴を置いてくれたのがわかった。

パチパチと瞬きをして、衛兵さんと靴を交互に見比べていると、背後から「どうぞ」

と声がかかり、さらに薄ら寒かった肩に暖かいローブがかけられる。

「使用人のものですが、とりあえずはご容赦ください」

「……あ、ありがとうございます」

たぶん王族ってお礼とかお詫びとか軽々しく言ってはダメなのだろう。でも「ありがたい」とって、小さな声だったけど、思わず口から出てしまった。

クシー子爵や事務官さん、衛兵さんたちは、ただの子供の声なんて聞こえなかったようにエントランスを出ていく。

ちよっと大きい布靴を履いて、私はパタパタと彼らの背中を追いかけた。少しだけ、その優しさにうるつときてしまったのは内緒だ。

クシー子爵の乗ってきた馬車にエスコートされて乗ることになった。

馬車の中は、四人が向かい合わせに座ったらしいになるぐらいの広さで、両側に扉がついている。

上にポツンとランプ型の灯りがあつたけど、あれは魔法で光るのかな？

ボンボンと手で座面を叩いてみたけど、クッションはイマイチで、ゴトゴトと動き出したら案の定、お尻にダイレクトに刺激がきます。

アンティークっぽい内装で、綺麗な馬車なんだけどね、残念ですわ。

馬車の中にいるのはクシー子爵だけで、私の対面に座っている。どうやら事務官さんは馭者席に座っているらしい。

王宮の敷地内の屋敷とはいえ、私のいた屋敷はめちゃくちゃ端っこにあるらしいので、目的地までは少し時間がかかってしまう。

その間に私はお勉強をしようと思います。

というのは、私ぐらいの年齢だと、王族って自分のいる国についてのお勉強を始めていると思うんだよね。

でも私はこの国どころか、王宮にいるはずの家族のことも知らない。

というか、そもそも第一妃とか第二妃とか、なんぞや？

そこそこ、この王族好きな小太りおじさんから教えてもらおう、という魂胆なのだ。今なら、使用人たちに虐待されて満足にお世話されてなかった可哀想な子、ということでも無知でも許してもらえらるだろうし！

よし、教えてくれクシー子爵よ。内心は不遜で、実際は少しだけ上目遣いでいろいろと聞いてみると、一瞬悲しそうな表情を浮かべたのち、クシー子爵はこの国のことを教えてくれた。

聞くところによると、現国王陛下には三人の妃がいる。

まだ王太子が決まっていない、という理由で三人の妃は同等な地位にいるらしい。

トゥーロン王国では、王太子の母親が正式な王妃となるんだって。

ちなみに王子は三人、王女は私を含めて四人なんだとか。

私の母親は外国人で身分が定かではないので、愛妾扱いとなり正式な妃ではない。

愛妾の子が王女でいいの……と思って尋ねたところ、とにかくこの国は階級意識が高く、王族が第一で神にも近い存在……という扱いになっている、と熱く説明された。

とにかく絶対的存在なので、母親の出自がどうあれ陛下の御子である、ということが重要なんだって。

ただし王族の中では階級が重視されるから、第四王女の私の立場は決して安穩^{あんのん}ではないっぽい。

さらに、その階級意識の高さは国政にも影響を与えていて、最近では貴族間で派閥争いがえげつないらしい。

しかも、この争いに次期王位争いも乗っかって、複雑になってきたとクシー子爵もため息が止まらない様子。

クシー子爵は、王族大好き第一主義だけど、階級で言えば子爵で下位貴族だから、気

苦労も多いんだろうね。

さて、この国では階級意識も高いけれど、その分、差別意識も高い。

とにかく人族が第一で、人族ではない亜人は差別の対象なんだとか。

奴隷を例にすると、人族は一部を除いて奴隷にすることを法律で禁止されていて、例外があったとしても奴隷として売買されることはない。

でも、亜人は亜人というだけで奴隷として売買していい。

人権———というか亜人権なんか、この国にはないのだ。

もちろん、こんな危ない国に旅行で訪れる亜人はいないので、供給が少ない。だから奴隷商は、非合法的な売買で亜人を捕まえてくる。

当然、外に行けば亜人が治めている国もある。

そのため、我が国はそういった国からは総スカンをくらっているとのこと。
ちなみに周辺は他国と地続きらしい。

この国の南には小国が集まった連合国があり、そこには人族や亜人がそれぞれ治める国があったり、我が国と交友がある国もまざっている。

とはいえ交友があるって言っても公的な輸出入ぐらいで、民間交流は皆無という寒々しい関係だ。

嫌われ者だなあ……って、当たり前か。

東側には、人族が治めている大国がある。

ここは亜人差別もないし、王制だけど階級意識も高くないため、いろんな国と交友を持つているよい国である。

なんと、大きなパーティーが開かれるときには互いに行き来したりと、我が国とも交友があるんだって。

へえーっ、心の広い国だね。

こんな迷惑千万な国とやりとりするなんてさ。

西側には段々と深くなる、広大な森が広がっている。

その向こう側には、帝国がある。

「帝国はとにかく交戦的な国ですな。強さが正義という思想です。皇位継承者も皇帝の子供の中から強い子を選び、皇帝が指名します。しかし、前皇帝は後継者を指名する前に亡くなってしまい、ここ数十年はずっと皇位争いが続いています。そこで無理やり属国にしていた国は今が好機と反乱を起こしています。まあ、帝国内で揉めていてくれれば、こちらに侵略戦争をしかけてこないですし、静かでもいいですよ」

という、クシー子爵曰く、やべえ国でした。

一通りのお勉強タイムが終了すると同時に、馬車がゆるりと停まった。

「さあ、お城だー」と期待して、クシー子爵のエスコートのもと馬車を降りたら……目の前にあったのは、なんか町内会の集会所みたいな、こぢんまりとした石造りの建物。

あれれ、と見渡してみると、ちょっと離れたところに宮殿がデーンと建ってましたよ。

あ、この国のお城って絵本に描かれているような尖塔タイプじゃなくて、前世で言うところの宮殿タイプなんだ。

観光気分で見学のぞに行ってみたが、王女といえどもみそっかす第四王女にはハードルが高いよね。

内心で残念がりつつ、私はクシー子爵の後ろについて、大人しくちょこちょこ石造りの建物の中に入っていくことにした。

自分がいたお屋敷より上等な赤い絨緞じゅうたんを踏み、あちこち歩き回る。

十分ほどかけて、やっと目的地に辿り着いたようで、前世の学校の教室ぐらいの広さの部屋に案内された。

壁の前には等間隔に衛兵が立っている。

絨^{じゅうたん}緞^{だん}はペルシャ絨^{じゅうたん}緞^{だん}のような複雑な模様が描いてあって、そこには明らかに高そうなスタンダードテーブルが置いてあった。

壁際には等間隔に豪華な花台が設置されていて、大きな花瓶に飾られた色とりどりの花の芳香が鼻をくすぐる。

事務官さんと同じような恰好をした職員さんが何人かウロウロしていて、私の正面には四人の獣人が所在なげに立っていた。

期待していたファンタジーっぽい光景に、おおーつ、と興奮して思わず前のめりになってしまった。

そこへ職員さんの一人がやってきてクシー子爵と話し始め、私はお預け状態になってしまった。

「あの……近くで見てきていいでしゅか？」

「はい、構いませんよ。どうぞ」

クシー子爵のお許しが出たので、走りたところをぐっと我慢して、早歩きで亜人たちのもとへ近づいた。

私から見て左端に立っている人の前で、じっと見る。

【鑑定】——見極める！

左端に立っているのは、背の高い男の人。体つきは細身に見えるけどしっかりと鍛えてそう。

粗末な白シャツから覗^{のぞ}く腕はたくましく、首も太いし、薄汚れた黒いパンツを穿いた足はめちゃくちゃ長いぞ。

パツと見の年齢は二十代前半ぐらい？ 少し長めの髪は背中まで伸びていて灰色……いや、銀色かな。しばらく櫛^{くし}を入れていないのかあちこちに短い髪が跳ねている。

整っている顔には鼻筋が通った高い鼻に切れ長の鋭い眼、さらには見たこともない珍しい銀色の瞳。

彼の薄い唇はへの字に曲がっていて不機嫌そうだ。

私に腹が立つてるといふより、奴隷になった自分に苛立つてるといふところかな？

そして、ケモミミ……狼の三角耳は髪の色と同じ銀色で周りを警戒するようにピンと立って左右に忙しなく動いている。

尻尾^{しっぽ}はボサボサだしボリウムもあんまりない。ストレスで抜けたか？ ちゃんとお手入ればもふもふパラダイスだろうに……もったいない。

少しだけ気になったので、私は意識して、彼の左足と左手を【鑑定】してみた。

よし、次。

左から二番目の人も、また男の獣人だ。

こちらはやや痩身で、年齢は二十代後半つてとこかな？

ちよつと仕立てのいい白いシャツとページジュのジャケットを着ていて、細身の茶色のパンツと黒い革靴も上等な品だと思う。

背は隣の背の高い獣人より拳二つ分低い……これぐらいが平均的な身長なのだろうか。柔らかそうな明るい茶色の髪は襟足ぐらいの長さでスッキリしていて、その頭にはふつさふさなケモミミ、狐の三角耳が鎮座しています。

んで、目が……細いつていうか、糸目？

肌も白いし赤味を帯びた唇は薄くて、うさんくさいタイプだなーって印象だった。

こちらの尻尾は、ボリユームたつぷりの茶色のモフモフです。まあ、手入れがされてないから、ちよつとくたびれた感じだけだ。

そして、意識して【鑑定】してみる。うーん、右目と……頭かなあ。

まあ、大丈夫ですよ。

はい、次。

次は二人がお互い抱き合っている男女の子供です。

いや、私も子供だけどね、今は。

女の子のほうが大きいけど、種族が違うつばいから姉弟ではなさそう。

まず、女の子のほうを【鑑定】します。

ふむふむ、大きな問題はないね。人のこと言えないけど、健康状況がイマイチつてぐらい。

ケモミミは猫耳で、尻尾は細くてしなやかです。色は黒で、髪の毛も涙目の瞳も真っ黒な黒猫ちゃんなのです。

この子は汚れて所々破れたワンピースみたいな服を着ていて、そこから出ているちよつと黄味がかかった肌の腕と足がびっくりするぐらい細い。

しかも、なんか痣とか切り傷とかがあるし、男の子を強く抱きしめている手指は水仕事で荒れたようにガサガサだ。

惜しいな……ふわふわ猫っ毛の黒い髪はショートヘアで、睫毛がバサバサで黒い瞳は猫目のキュートさで、ちんまりとした鼻と口がめちゃくちゃ可愛いのに。

お隣のもう一人は、私より小さな男の子だ。

猫獣人の女の子に抱きしめられたまま動かず、目が虚ろな感じがヤバいな。その瞳は光のない琥珀色でした。

クルクル巻き毛の白髪は耳や首が隠れるほどの長さで、そこに生えているのは白い毛の丸いお耳です。尻尾も猫ちゃんみたいに細くしなやかで白に黒の模様があるが、ピクリとも動いていない。

【鑑定】してみても健康状態以外とくに問題はないけど、この子の持っているスキル、ヤバそうだなあ。

でも、いっか。この子供たちも大丈夫……たぶん！

トテトテとクシー子爵のもとへ戻った私は、彼に「あの人たちみんな引き取りましゅ」と告げた。

ケモミミ、ケモミミ、と脳内もふもふパラダイスお祭り状態だったが、そんなことは微塵も顔に出さず言った私に、クシー子爵は「それは、ようございました」と笑顔で応えてくれた。

でも、その前にそれぞれの獣人たちのマイナス点を教えてくれたよ。

最初の狼獣人は左足がやや不自由でガサツで教育が難しい。

次の狐獣人は気位が高く算術などが得意だが、重人奴隷に書類仕事をさせるわけがないので使いどころなし。

次の子供たちは観賞用としてはイマイチだし、互いにくつたりくついているものだ

から下働きの仕事もできない。

それって……奴隷として余ったというより、引き取り手が王族どころか使用人粹でもなかったってことだよな？

とはいえ、私がいらなかったら【処分】するらしい。

いやいやいや、ダメでしょ!!

そんな私の心の中の焦りも知らず、彼らは準備や手続きのため、複数の職員さんに連れられて一旦部屋を出ていく。

私はクシー子爵とスタンドテーブルで簡易お茶会だ。

手続きが済むまでの短い時間だけど、だけど……、やっとともに飲み食いできるううっ。

クシー子爵が私に用意してくれたのは、蜂蜜たっぷりのホットミルクと、ゼリーやババロアといった柔らかい茶菓子。

まともに食事をしていないだろう私の胃に優しいレパートリーです。

用意してくれた高脚の椅子によじ登り、ありがとう、ありがとうと声に出さずにお礼を言いながら、チビチビ、口に運んだ。

そして、クシー子爵にいろいろとお願い事をしました。